
会長は・・・

レオ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会長は・・・

【Zマーク】

Z6933Z

【作者名】

レオ

【あらすじ】

凜架学園、生徒会会長、美原鈴羽。

会長の田つきに生徒たちは引いてしまつほどのか
クールな田つきの会長。

ある日、放課後サッカー部員で癒しをもらつていると・・・?!

★第1話★

れいがくえん
鈴架学園
・生徒会会長
・美原鈴羽。

ただいま、校舎見回り中。

「走らないで、そいつ、うるさい！」

今急いで
ひいて

「母娘の間で、何が何でも隠さないで話す約束をしたんだから、お母さんもお話を聞かせてもらいたいんだよ。」

20回ぐらい唱えている間に相手は強歩で

周りの人もささあー・・・と引いていく。

ガタンツ

あたしは生徒会室のドアを勢いよくあけた。

うニシテ一ツハツハツニリムダ。

席に座つて書類の整理などをしていく。

今日も書類は山積みて、余裕で放課後までかかるに至った。・・・・・

6時間目が終りましたが、現在までふつ通しで書類作業中。

さすがに首と目と手が死んできた・・・。

古事記傳

書類作業を進めてる途中、ふと校庭から聞こえる声に耳を傾ける。

「るあ！バス！」

『...レジ...-チャットル』

『たせるかあああー』

サッカー部の声だ。よく声が通つていて
惚れ惚れするな・・・

あたしは少し休憩と自分に言い聞かせ、窓からサッカー部を観た。
赤Tと青Tで分かれて試合してるらしい。

ここはサッカー部、チームワークがよくて県大会でも
何度も優勝している、つわものチームだ。

「はあ・・・癒されるわあ・・・」

サッカー部員たちをみながら窓際に頬杖をつく。
パアッと簡単に部員たちを見ると、一人だけベンチに座つて見て
いる人がいた。

「ちょ・・・やばい・・・イケメンだ・・・！」

あたしはうつとりとその男子を眺める。背、高いなあ・・・
何で試合出でないんだ？ 怪我してる？

そんなこんなで、5分ぐらいたつて

あたしは我にかえる。

「書類作業作業・・・・・」などと同時に限つて何してんだ・・・

また席に戻つて作業を始める。

・・・が、どうしてもさつきのイケメンをまた見たくなつてしまつ
た。

どうしようもない、この見たい感にあたしは負けた。

あたし以外は知らないけど、あたしはイケメン大好きなのだ。

だから、作業の合間合間にサッカー部員で癒されている。（毎日）

もう一度窓から覗くと、不意にベンチに座つてゐる男子と田が合
あわあわと窓から首を引っ込めた。

・・・あぶなかつたあ・・・

もう少しで秒殺ところだつた・・・

次はしっかり気合いを入れて作業に取り掛かけようとしたときだつた。

コンコンッ

あたしはノックで自分をいつも美原会長に戻した。

「はいって。」

「失礼しマース」

がらつと入ってきたのは・・・

背の高いイケメン・・・そう、さつき言つてイケメンだ。
な、なんでここに・・・?!

「えつと・・・用件はなに?」
いつもあたしで精一杯答える。
でも顔はいまだにほつてつてる。
み、みてたつてばれてない!?!?
あたしはあたふたしてた。
そして、次のイケメンの言葉に
あたしは思い切り赤面してしまつた。

「俺の事ずーっと見てたでしょ?かいちょーさん?」

ぶわあつと頬が熱くなるにつれて
あたしの鼓動はとても早くなつていた。

* 第2話 *

「な、なんのこと?」「
とりあえず否定してみる。

けど、多分いや絶対に無意味だ・・・

「否定権無しだろ?さつき俺とめえあつたとき
あわあわと顔引っ込めたくせして」

「うつ・・・やっぱり見てた・・・?」「
さすがに恥ずかしい。

あたしがイケメン好きつてばれたんだよね・・・
「まあ、かいちょーがイケメン好きつてのは
だーいぶ前から知つてたけどね」「
は!?

さすがのあたしも声を張つてしまつた。
「なんで知つてんの!?

「1年のときからずーっとサッカー部員みてただろ?」「
・・・ハイ

やられた。

ばれてたなんて思いもしなかつた。

あれ・・・1年から知つてるつて・・・?

「も、もしかして先輩?!」「

「ビンゴー」

ま・・・まさか・・・先輩だつたとは・・・
「す、すみません・・・」「
なにが?」「

「いや・・・なにがつてかどこまでも・・・

「別に俺はいいんだけど。てか、俺の事今まで知らなかつたわけ
?」

「ええ、まつたく存じて居りません・・・」

「珍しいな？俺、鈴架学園ノートにもてるんだけどな」

「あー・・・すみません、そっち系まつたく興味ないんですね」

「イケメン好き、なのに？」

「うつ・・・ええつとですね・・・あたし」・の・みーのイケメン

好き、なんで・・・」

「じゃあ、俺は会長好み？」

「Y e s ・・・」

「くつ・・・会長つて意外と面白いな？」

「さあ・・・そなんでしょうかね・・・。田つわ鶴」のに

変わりはないんですけどね・・・」

「そうか？あ、わかつた髪の毛だ」

そういうと先輩はあたしを引き寄せて
くるつと反転させて、髪の毛を上げた。

「や、ちょ、せんぱい！？」

ぱちんっと音がなる。

な、何の音！？

「ほら、くくつたら全然かわいいじゃん」

またくるつと反転させて

ドアで反射したあたしを見せた。

いつも髪の毛をたらしつぱなしのあたしは
自分が髪の毛を上げている状態に
違和感を感じた。

「どうよ？」

「・・・なんか変な感じですね」

「こつもたらしつぱなしだからだね」

「まあ・・・そなんですけどね・・・」

そこからは完璧に沈黙が続いた。

あたしはふと、思つたことを質問した。

「あの・・・先輩、なんでサッカー出でないんですか・・・？」

「まだ引退ははやいんじゃ・・・？」

「ああ、俺、脚怪我してんだよ」

「へ!? 大丈夫なんですか？！」

「まあ、ちょっとした打撲だから。大丈夫」

「なら、いいんですけど・・・」

やつぱり心配だった。

あたしの心の気づいたのか先輩は
あたしの頭を撫せて

「大丈夫心配しないで」

さすがにちょっと恥ずかしくて「書、書類作業に戻ります、お大事
に・・・」

といつて席に戻つた。

「あ、俺ちょっと見といていい？」

「へ？！え、あ・・・はい」

あたしはなぜこんなに不自然な返事をしているのだろうか。
とりあえず書類作業を進めていく。

目の前で見学している先輩がものすごく気になるけど・・・

「サッカー・・・戻らなくともいいんですか？」

「別にいいんだよ、どーセでないし」

「そう・・・ですか」

・・・戻つてほしいうような戻つてほしくないような・・・

面倒くさいこの気持ち

・・・いつたいなんなわけ？

「そーいえば俺かいちょーの名前しらないな」「へ?！」
さつきまで沈黙だつたのに
いきなり先輩がしゃべつたものだから
びっくりしてしまつた。
「え? そこまで驚く?」
「あ、いや仕事に入り込んでたんで・・・」「ほんと、かいちょーは眞面目だね。もう少し気楽に生きなよ
「それは無理です。くそ眞面目に生きないと世の中たえられないで
すよ」
「ま、いつか絶対苦しくなると思つたけど。そのときは俺を頼りな
「な、なんでそつなるんですか!」「だつて俺の事好きなんだろ?」
「・・・顔が、ですよ」
何の会話だ・・・これ
どうでもいい話をあたしはペラペラと・・・
「ふうん・・・で、かいちょーさんのお名前は? クラスも言つてくれ」
「あ・・・美原鈴羽です。2-Aです」
「俺は久仁^{くにえだ}江田哉也、3-B。あらためてようじへ」
「コリと笑う先輩に思わず見とれる。
・・・かつこいい・・・
「そんな眼見されても困るよー・・・?」
「!!--す、すみません!」
「いや、別にいいけどね。てか、かいちょーつもうすすべ6時回るよ。まあ、まだ外明るいけどさ」「6時ですか・・・まだまだ帰れそうにないですね」

「え、何時にかえんの？」

「8時ぐらいですよ」

「えー？ 学校に許可得てるの？」

「はい、なので堂々と8時までやつてますよ」

「でも8時つて結構暗いんじゃ？」

「・・・大丈夫、です。どうせ一人なので。」

「そう、どうせ一人。
家には誰もいない。
父も母も兄弟も。」

「ご家族心配す・・・」

「先輩、サッカー、試合終わつたみたいですよ、行つて下さー」
あたしは先輩の言葉をさえぎる

「俺別に・・・」

「良いから行つて下れー。部活のサボリは許しません。
ほらー早く行つてーー！」

あたしは先輩を無理やり廊下に追い出し
ドアを閉めた。

「・・・ご家族なんていませんよ・・・先輩」

「だつて、あたしの家族・・・」

「殺されたんですから・・・」

「さすがにやばい。」

涙があふれる。

このじるその話に触れていなかつた分だ。

あたしはペタリと床に座つて泣きじやくつた。
すると、ドアがあいた。

あたしは気にならぬいたままだつたけど
不意に後ろから抱きしめられてびっくりした。

「先輩・・・？」

「『めん、俺のせい。まじで』『めん』

「いいんです……慣れてるので……はやく部活行ってください」

「でも……」

あたしは先輩から離れて、先輩に笑いかけた。

「過去は過去ですから、ね。うん、そうです。いってらっしゃい」

先輩は「わかった」といつて、生徒会室を出て行った。

あたしはまた、席に着き書類作業に戻った。

「集中、集中……」

とにかく集中した。

・・・悲しい過去を見えなくするにはこれしかないので。

「後、イケメンを見る……」

自分でも怖いほど最近

イケメンが大好きになってしまった。

「先輩なんてど真ん中ストライクですよ……」

窓を見てなんとなくつぶやいた。

* 第4話 *

「 もうすぐ8時回るけど、いいの？」

不意に窓のところから声が聞こえて
あたしは一部の書類を落としてしまった。

「 へ？！ うわつヤバイ！」

急いでかき集めて拾いあげる。

そして窓のほうを見ると

案の定、先輩がいた。

「 お、おつかれさまです」

「 お疲れ様、後どのぐらい？」

「 あ・・・えと、あとこここの書類だけです」

「 そつか、じゃあ俺待ってるわ」

「 い、いや！ いいです、帰つてください！」

「 それは個人の自由だろ。」

「 でも変える方向別々だと思いますよ？」

「 大丈夫、今日俺かいちょーの家とまるから」

「 にや？！ ？！ ？！ ？！ ？！ ？！ ？！ ？」

先輩の突拍子もない一言に

あたしは思わず変に声をだしてしまった。

思いつきり裏返つてゐるその声にか

先輩はクツクツと笑つてゐる。

「 そんなに驚くか？」

「 ああああ、あたりまえでしょーーーーー！」

「 社会人になればこんなこと田常茶判事だよ？」

「 まだ高校生ですーーー！」

「 まあまあ、そんなに取り乱すなつて。」

「 て、てかーなんであたしに構うんですか！」

普通、きもちわるいでしょ？一年からずっとサッカー部員を田の保養にしてるなんて・・・

最後はす”く小声になってしまった。

いやでも、恥ずかしいものだ・・・

「別に？俺知つてた身だし。最初はこいつなんだ？って思つてたけど、

徐々に違和感もなくなってきたし、今となつては、今日も見てくれる？

思つてサッカーがんばれるし？ま、そのせいでも怪我したんだけなあたしの口からしつかりとした声は出ず

「あ、わわわ！？」とか言つ意味不明な言葉しか出なかつた。

「それと、さつきの話。俺そういうのまじでほつとけないから」

いきなり真剣な顔になつた先輩に
あたしは思わずまた書類を落としてしまつた。

「わわつす、すみません！」

「いいよ、俺拾うから」

書類を集めて、にっこり笑つて「はい」と渡してもらつたときにはあたしの頭の中はパンク状態・・・。

「とにかく、その書類作業終わらせなよ」

「あ、は、はいー」ほひーほひー

息づいていった言葉の語尾にあたしはむせた。

「ふわああ・・・やつと終わつた・・・」

ケータイを開くと、すでに8：30を回つていた。

学校から何も言われないのはあたしの権力つて感じかな。

「あれ・・・先輩？」

どこにも見当たらないと思い、先輩と呼ぶと後ろから「終わつた？」と声が聞こえた。

「うわつ先輩、いつのまに後ろに？！」

「だーいぶまえにきたんだけど？」

「あ・・・すみません、まったく気づいてませんでした。

「くつ！すごい集中力だな？さすが学年トップの成績だ」

「何で知ってるの！？」

「そこに張つてあつたから。」

「あ・・・」

「ほら、はやく書類片つけてかえりうよ」

「そ、そですね」

あたしはなにを動搖してるのだろうか？
小さいころから友達は男ばかりで

そこからイケメン大好きが発生したものの
男子に緊張することなんてなかつたのに・・・

「ん？ どうした？」

「いえ・・・なにも」

この動搖は・・・なに？

* 第5話 *

「それじゃあ、この書類、職員室に届けてくるので待つててください。
あ・・・いや先に帰つてもいいですけどね」
苦く笑つて、あたしは職員室に向かつた。

職員室は生徒会室と実は一番離れている。
言えば学校の端と端にあって
行くのに5分はかかる。

この学園、無駄にでかいんだよな・・・

廊下にはあたしの上靴の音しか聞こえないものだから
不気味で時々キヨロキヨロしてしまつ。
暗いのはいつものことだけど
なぜか今日は寒気がしてならない。
「早くいかないと・・・」
スタスタと歩くものの
やはり寒気がする。
「もういや！」

あたしは猛ダッシュで廊下を走つた。

職員室ドアの前であたしは胸をなでおろした。

暗いのはなくなつたけど
寒気はまだして、気持ち悪い。
気持ち悪いけど先輩を待たせてるから
職員室にツカツカと入つた。
「失礼します。書類、置いときます」
「はーい、」苦勞様です

英語担当の西戸先生が「コアを

おいしそうに飲みながら返事した。

「失礼しました。」

職員室ではあくまでも鈴架学園・生徒会会長・美原鈴羽なのだ。真面目を突き通すに限る。まあ、会長だし。

職員室を出ると、そこには先輩が壁に背中を預けて立っていた。

「先輩？！」

「迎えに来た。会長、いちいち往復するのもいやだろ？」

「いやまあ・・・はい。」

「俺だつて面倒くさいつてーの。ほら、帰るぞー」

「は、はい」

そつか、あの寒気、後ろに先輩がいたからだ
そう思つたとき、また寒気を感じた。

学校からあたしの家まではおおよそ15分程度の道のり。
まあまあ近いほうだとは思う。

「かいちょーなんか元気ないけど？」

「あ・・・えと、さつきから寒気がして・・・」

「寒気？」

先輩は後ろを振り向いたけど、誰もいなかつたようでも
また前を向いた。

「廊下歩いてるときは、先輩が後ろにいるからかな・・・つて
思つたんですけど・・・」

「俺、かいちょーが行つた後外の渡り廊下からいつたから
それはないな」

「そなんですか・・・つてそこ通るの禁止ですよー！」

「あ、そういうばかいちょーって会長だもんね、ごめんごめん」

「・・・むちゅくちゅ馬鹿にされてるような気がするんですけど？」

「うん、馬鹿にした。『ごめん』
「んもーつークシユンッ」

「何、寒い？」

「い、いえ・・・別に・・・クシユンッ」

「寒気つて、もしかして・・・」

「へ・・・?ふわ・・・わわ・・・」

「美原?！」

先輩の声とともに、あたしの意識は途切れ
ああ、あの寒気は風邪だつたんだな・・・と仄づいたのだった。

* 第6話 *

「ん・・・ふつ・・・」

「美原、大丈夫か？」

「・・・先・・・輩・・・」

先輩の声にうつすらと目をあける。

その目の前には先輩がいた。

「わつわつわ・・・」

あたしは急いで起き上がった。

おきていいきなりあの顔があつたら

誰だつてびっくりすると思つ・・・。

「ちょい、じつとしてろ」

そういうと先輩はあたしの頬に手を添えた。

「まだ熱あるな・・・熱い？寒い？」

「あ、えと、あ、や、う・・えと・・・
さむ、ささむいです・・・」

何だ。この言葉。

宇宙人か！あたしは！

「じゃあ、布団一枚追加してくるわ。」

「あ、いやいいです！大丈夫です！帰ります！」

あたしは急いで起き上がり

ベットから下りた。

と・・・そのとき、あたしは体の力が抜てしまった。

「わ・・・」

「つと。まだ起きんな。ほら」

抱えられたまま、口に体温計をつっこまれ
あたしはなにもいえない状態になつた。

「ん・・・」

すぐに抜かれ先輩はあきれた顔で

「38・5。こんなんで帰れるか。あほ」

「わかればいいんだよ、ほら、寝てろ」

「先輩はあたしのあたまをかき回して
違う部屋に消えていった。」

「・・・・・んー・・・・?」

あたしが田を覚ましたときには
部屋から物音もしなくて不気味だった。

ふと、手に体温を感じると思つてみると
あたしの手の上に先輩の手が重なつていて
先輩はベットに突つぶして寝ていた。

あたしはその寝顔に見とれてるわけで・・・

「先輩・・・・・かっこいい・・・・」

あたしは先輩の髪の撫ぜて
先輩の笑顔で癒されていた。

「ん・・・・美原・・・・?」

「わわつーは、はい！」

「起きたか・・・・大丈夫か？」

「え、あ、はい！まだ少しだるいですけど大丈夫です」

「そつか、じゃあまだ横になつてる。」

「いや、でも・・・・」

「いいから。会長、毎日6時間田から8時過ぎままで
ぶつ通しでやつてたんだろ？」

「そりや、体も壊すつてーの」

「・・・・すみません」

「まあ、これからは気をつけること。」

「今度からは俺がちょいちょい呼んでやるよ」

「い、いやでも・・・・」

「会長の事を考えての話。ほーら、横になつて

「・・・先輩どこで寝るんですか。」

「俺ソファーで寝るから大丈夫」

「風邪引きますよ」

「じゃあ、会長のベットにはいつてもいい?」

「／＼／＼／＼／＼／＼な・・・?!

「ま、かいちょーが寝付いた頃に欲があれば

はいりつかな。」

「なつ・・・」

「はいはい、とりあえずおやすみー」

布団をかけられ、半強制的に
あたしは横になつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933z/>

会長は・・・

2011年12月25日13時45分発行